

◆特集 病院図書館のニューウェイブ◆

IT化時代の司書とは —図書室でのマン・パワーを探る—

山室 眞知子

I. はじめに

病院図書室のネットワークが誕生した頃、「医学の日進月歩に対応したサービス」という言葉がよく使われ、私達はそれを目標としてきた。今日では「情報のIT化に即したサービス」という言葉に置きかえられるのであろうが、果たして利用者はわれわれにどのようなサービスを期待しているのだろうか。情報のIT化によって利用者、とくに医師の利用や依頼は減少の傾向にあるといわれている。また、新しいデータベースや情報源が図書室(司書)を素通りして医師のもとに届けられていることも確かである。IT化時代の病院図書室におけるマン・パワーはどう活かされるべきか、それを探ってみたい。

II. 病院図書室の司書の存在意義

これまで病院図書室(以下、図書室)の司書(以下、担当者をも含む)の主な仕事は何だったのだろうか?利用者(主として医師)が必要な文献を取り寄せたり、利用者に代わっての文献調査(サーチャー役)であったとしたら、つまり情報に関しての秘書的要素が多かったことになる。「それだけではない!」との反論は当然であろうが、ごく単純に考えてそれらの役はIT化によって秘書の手を煩わす必要がなくなったばかりか、電子ジャーナルで図書室に届いて

いない雑誌が読めることにもなった。

また図書室はサービス部門とされていないが、司書が配置されていなかったり、名目だけの兼務しか配置されていない図書室もある。しかし、図書室の設置、図書や医学雑誌の収集するだけがサービスではない。

病院機能評価では図書室の設置を条件としながら「司書の配置がのぞましい」として義務づけられていないことにも問題があろう。「図書室」というスペースと、所蔵されている「資料」は設備であって、サービス部門といいながら「サービス」をする司書の存在が忘れられているような気がする。従って見返りの収入がない設備であるため病院の経営上の都合で、予算削減の対象とされるのであろう。司書が配置されていなければこそ、資料を十分に管理し活用し、また所蔵していない資料をも図書館間の相互協力によって提供して利用者を満足させ、緊急時や医療の質の向上に役立つということがあまり管理者に認識されていないのではないか。

以前は、所蔵図書の冊数に応じて司書の数が必要とされた。しかし現代では資料が少ない程有能な司書が必要とされる。とくにデジタル化された昨今こそ、司書の質が、サービスの質に否応なしに直結することを認識しなければならない時代であると思う。では、質のよい司書とはどんな司書だろうか。

III. IT化に求められる司書とは

病院図書室だけではなく公共図書館にもデジタル化の波がおしよせている。浦安市立中央図

YAMAMURO Machiko

京都南病院 図書館

libkmhp@mbox.kyoto-inet.or.jp

書館長の常世田氏は「印刷物とデジタル系の媒体を上手に混在させて利用者に提供するというスキルにならなければならない。」とし、これを「ハイブリッド・ライブラリーとよびたい。」²⁾としている。ハイブリッド・ライブラリーは資料とインターネット端末、司書とでなりたつという。また館長の立場からは「利用者のニーズを的確に判断して、最も効果的かつ正確に情報提供するということを可能にするスキル、精神構造、そういうものを持った司書を育てるといのが重要である。」²⁾という。

公共図書館では司書の配置とその専門性と能力は、図書館における利用者サービスに最も重要とされている。利用者の殆どが専門職であり、1名しかいない病院図書室においては公共図書館以上に司書の資質、能力が問われて当然ではないだろうか。少ない予算とはいえ図書室に投資される費用を十分に活用し、利用者を満足させるサービスができるか否かは、たった一人の司書に委ねられているとって過言ではない。従って病院管理者は「有能な司書を配置しなければならぬ」と考えて欲しい。

現在ではどの種の図書館でも資料は印刷物だけでなく、デジタル化の波がおしよせている。それが進めば進むほど、それに適した司書のスキルが必要である。常世田氏はまた、「単にPCの操作やインターネットの操作が上手というのではなく利用者が必要とする情報を提供することに関して、個々のスキルを高めていくことが必要。最終的には印刷物とデジタル系の媒体を上手に混在させて利用者に提供するというスキルにならなければならない。」³⁾ともいっている。司書自身にも当然時代に即したサービスに正面きって立ち向かおうとする意識をもって、自ら学ぶ姿勢が必要なことはいうまでもない。

IV. 司書の専門性と研修

俗にいわれている司書とは、すべての図書館に共通しての知識、理念、技能を持つ専門職と

評されているが、さらにその司書にも所属する図書館によって専門分野があるということあまり認識されていない。多くの場合、司書の有資格者であればそれでよし、とされてはいないだろう。

図書館には、公共図書館、大学図書館、病院図書館、音楽図書館、美術図書館、児童図書館、学校図書館等、それぞれの図書館には異なった利用者と専門部門がある。従ってそれに適した専門知識が司書に要求される。たとえ有資格の司書であっても所属する機関、企業の図書館をマネージし、利用者からのレファレンスに応えられる司書であるためには、否応なしに必要な研修に励まねばならない。熟練すれば司書でなくても誰でも出来るような仕事に満足していると、図書室に誰かいれば良いということで、パートや派遣の配置になっても致し方あるまい。

病院の医療の質を高めるためには図書室と司書がまず必要であるが、司書は自分のスキルを高めることに立ち向かう姿勢を示すべきではないか。とくに有資格者はプライドよりもライセンスをもつ責任の重みを感じるべきであろう。「出張が認められないので研修会には参加できない」とは言うて欲しくない。しかし身分が安定しないパートや派遣の担当者にはこれはあまりにも酷である。質の高い司書として自主研修に励ませるためにも常勤の司書をのぞみたい。

V. 患者さんへのサービスと司書

近年患者さんへのアメニティ、患者サービスの一環として、または患者さんへの医学情報の提供とうさまざまな目的で多くの病院に「患者さんのための図書室」が設置されたり、公共図書館からの出張サービス、医療スタッフのための病院図書室の公開などで患者サービスが行われている。その形態は実に様々であり、多くの場合は病院職員のコーディネーターにおいて、患者さんへの対応はボランティアに任せられている。しかし入院患者さんへの図書サービスは

単に暇つぶしの読書にとどまらず、できるなら治療効果をあげることまで考えたい。患者さんが自ら早く治りたい、社会復帰したい、残された余命を有意義に生きたい、という意欲を起こさせる、また意志決定に役立つ読書や、医学情報の提供が必要ではないか。そのためには医学資料以外の本や資料の選択も当然必要である。90歳の高齢で現在なお医療の現場におられる日野原重明医師の著書が、どれほど多くの高齢者に生きる意欲をあたえているか、「これは読書のための本（一般図書）ですがまさしく医学書です」とある病院の司書が評されたが私も同感である。

患者参加型の医療ということも言われている。そのためには医師から受けるインフォームド・コンセントをよく理解し、納得した治療をうけるための知識を補う医学資料の提供こそ、病院司書の役目ではないか。患者さんと医師とのコミュニケーションを促進させるといふ大役もあろう。ボランティアの協力はあっても患者さんへのサービスの主役は病院司書であって欲しい。患者さんへのこのようなサービスこそ、これからの病院司書がサービスの域を広げて行く一つの道であるように思う。しかしそのための資料の選択、適切な情報の提供について、われわれはこれから学んでいかねばならないこと大である。大学の医学図書館も公共図書館も、そしてマスコミも患者さんや一般市民への医学情報の提供に関心を示しはじめている。

「医学・医療情報の海の中で患者や市民（そしてマスコミ）がおぼれてしまわないよう、助けてくれる人がほしい。個人的には、その役割はライブラリアンではないかと考えている」⁴⁾

日経メディカル副編集長の北澤京子さんのことばである。患者さんの一番身近にいる私達こそ真剣に考えていきたい。

私への個人的なメールの中で、ある養護学校の教師から次のような話を聞いた。

「筋ジストロフィーの彼らは中学部の時に、Dr.から病状や今後のことを告知されます。そ

れらはある程度「受容」し平静さを保ってはいませんが、心の中の闇はうかがい知ることができないぐらい深いのです。筋ジストロフィーの病気の特性は、昨日できたことが今日はできないという「喪失感」との折り合いをいかにつけていくかということです。（中略）彼らは手の機能の問題で本を読むにも自分でページがめくれません。しかし本を読む喜び、本をよむことによって「生きる力」を養っていくことができると考えています。（後略）」

われわれはこのような不治の病を持つ患者さんと向き合った時、どのような読書サービスができるだろうか。しかし病院司書ならば主治医や臨床心理士の指導や協力のもとに本を選択、提供することができるのかも知れない。このような読書サービスが患者さんの心の支えとなり、そして「生への意欲」に役立つなら、病院司書冥利に尽きるといえよう。IT化が如何に進もうとも、新しい情報提供の道がここにもあるような気がする。そのために考えたり試行する時間をつくりだすことからまず始めなければならないだろう。

VI. おわりに

情報伝達の進化にともなって当然司書のサービスの拡大を考えねばならないのは言うまでもない。IT化に翻弄されるのではなく、うまく付き合っていく道を開いていきたい。まだまだ病院図書室の司書が活躍する場があるはずである。院内で図書室が孤立化しないために、新しい突破口を探してみたい。

引用文献

- 1) 常世田 良 浦安図書館にできること一図書館アイデンティティー 東京：勁草書房；2003. 6p.
- 2),3) 同 上, 9p.
- 4) 北澤京子 医学・医療情報とマスコミ報道。みんなの図書館, 2003, 通巻No.317:13p.